

リスクと灯台

キーワード リスク,シーカヤック,沿岸域,旅,冒険貸借

世の中には、手漕ぎの小さな舟で海を旅している人たちが大勢いる。21世紀前半の今、のことである。手漕ぎの舟で海を旅する。なんとも酔狂な連中だと思われるかもしれないが、日本にも数千人、いやいや、もう万単位になっているかもしれない。世界に目を向ければ数十万人どころじゃない。もっとも盛んな北米には数百万もの人たちが海や湖を漕いで楽しんでいる。

彼らが使うその小舟、カヤックと呼ばれる。特に海を旅するためのカヤックは、シーカヤックやツーリングカヤックとも呼ばれ、すでに日本にも50万艇ほどが保有されているはずで、日常的に旅を楽しんでいる人がもう数万単位になっているだろう、ということだ。

そんなカヤックによる海を旅する活動が始まったのは、日本では1987（昭和62）年のこと。すでに38年の歳月が流れたが、その始まりから海を旅しているのが私（ここはワシと読んでほしいが）である。何しろそれを仕事にしていまい、海を旅しながら報告を書くことを生業にしてきた。肩書きとしては海洋ジャーナリストと今も自称している。

シーカヤックで海を旅することは、英語ではシーカヤッキングと呼ばれている。しかし、日本語には「旅」という含蓄のある言葉があるため、私らはシーカヤッキングを「海旅」と呼んでいる。

「旅」には「賜ぶ（たぶ）」という意味がある。自然から何かを賜るという含意だ。何かを食することもやはり「食ぶ（たぶ）」である。食べ物は自然からの賜り物であるから分かりやすい。「たびたもう」という言葉もある。「賜び給う」と書き、お与えくださ

るという意味の尊敬語だと辞書には載っている。

なので、旅というのは、自然が私らに何かを与えてくださるという意味でもあり、旅をすることで私らはいつも何かを自然から頂いているということになる。旅とは、実はそんな活動のことなのである。

カヤックという小舟は、数千年前から使われている。人類にとってはまだ初期段階の舟である。研究者によっては1万年前から、という者もいる。しかも極北地方の沿岸で使われてきた。アラスカやアリューシャン列島、グリーンランドといった地域だ。構造はというと、細い木を組み合わせて骨組みを作り、その上に海洋ほ乳類の革を被せ、外科手術のレベルで革を縫い上げてある。とてつもなく精巧な作りで、20世紀初頭まで極北の海で使用されていた。移動用でもあったが、主に漁猟用の道具だった。

カヤックには人が乗り込むための穴が開けてあり、そこに下半身を入れて腰の上あたりに防水のカバーを着用して穴を塞ぐと、人とカヤックは一体化するようになっている。下半身がカヤックのカタチをした水上動物のような、さながら「海のケンタウロス」といった風情になると英語圏ではよくいわれる。ギリシャ神話の、あのケンタウロスである。

下半身がカヤックになった人たちは、水上世界を自由自在に動き回ることができる。現在のカヤックは、プラスチックで成形されており、革張りのカヤックとは違い工業製品として売られている。シーカヤックは本来のカヤックにもっとも近い。人が乗り込むところはコックピットと呼ばれ、前後にはハッチがあり、そこに旅をするための野営道具や食料、水などが入っている。ハッチのある



右)図1. 瀬戸内海日生諸島鹿久居島の南端にある鵜ノ石鼻灯台の下を漕いでいる。日生諸島は、本州からほんのすぐのところの14もの島々が並んでいる。そのうち9島は無人島。架橋されていない有人島が2島。島々の全人口はもう2000人にも満たない。人々が消えていく島々。かつての灯台守たちの悲哀を思い出す。岬の灯台守たちの暮らしを

左)図2. 日本最西端、与那国島西崎灯台の断崖下を往く丸木カヌー。2019年、国立科学博物館が主導した旧石器時代である3万年前の実験航海。台湾から漕ぎ始め与那国島までの225キロを45時間ほどで漕ぎ渡った。黒潮という巨大な海流を横切った。私はこの航海の監督を任されていたが、実はこのゴール直前の断崖下の流れがもっとも手強かった。まさにリスクだった

空間は水密になっており、転覆して人が脱出してもカヤック自体は沈まない。転覆しても脱出しないで起き上がる術もあるし、沈まない舟ほど安全な舟はないから、世界中に今も拡がり続けている。

ということで、やたらと前置きが長くなったが、本稿はそのカヤックから見る灯台の話である。しかもリスクと灯台である。

カヤックの旅は沿岸を往くことが、ほとんどだ。陸に近い海を旅している。特に陸側に自然の海岸があるようなところだ。実は、護岸された海岸線には賜るものがあまりない。逆に自然の海岸線には賜るものが多い。この沿岸の海と陸を合わせて沿岸域（コスタルゾーン）と呼び、環境用語として使われる。この沿岸域、実はもっとも生物が多様なゾーンだといわれている。したがって、沿岸域を旅するカヤックは、その多様な生物ゾーンを旅している。夜になると上陸してキャンプである。

ところが、この沿岸域は浅いために波が立ちやすい。碎波帯とも呼ばれ、波が碎けるゾーンである。沖合に行くときのために波が緩やかになる。そして、その自然海岸の一部には断崖がある。断崖の下には暗礁があることも多い。その断崖に当たる波は常に跳ね返ってくるため、より高い波、クラボチスと呼ばれる三角波が立つ。

実は、この断崖下の暗礁とクラボチスが立つような海を往くことがリスクの語源であることはあまり知られていない。ある時は危険な海を往くこと、それがリスク。リスクという存在を理解した上での行動も含めて、リスクというのである。カヤック旅では、そのリスクを理解し、リスクを取るか取らないか、往くか往かないかの判断をいつもしている。

波がない穏やかな日であればリスクは充分に取れるし、そうじゃない場合は沖合を回るか海に出な

い。このリスクを取る、取らないということから保険なる概念が生まれた。当初は、冒険貸借というもので、その後に海上保険が生まれたという歴史がある。冒険貸借が盛んだったのはイタリアだった。

だから、リスクは具体的な場面から来ている。元々はラテン語であり、それ以前のギリシャ語ともいわれている。しかも航海用語であったためリスクが今でも海と関係している。

そして、そのリスクのある場面に存在しているのが灯台だ。多くの灯台は断崖の上にそびえ立っている。つまり灯台の下はリスクなのだ。カヤックから灯台が見えてくると、その下にはリスクが存在していると私たちは理解している。

当然ながら、灯台、つまりライトハウス本来の役割を利用することを私らはあまりしない。夜の断崖下ではリスクが取れないからだ。もちろん防波堤灯台なら利用するが、基本的に夜は移動しないのである。

とはいえ、昼夜をこえて長い海峡を横断する時などは、灯台が放つ光が希望をもたらす。それは船乗りたちがみんな感じることだ。夜の海に灯される光。その光と希望の関係。光を見ると、なぜ人は希望を感じるのか。そこにも灯台の役割がある。光、その本質は素粒子である光子。光子は粒子であり波でもある。まるで水の分子のようでもある。

灯台とは、リスクという存在を教え、光と希望の関係性を教えるシンボルだ。灯台学を構築するには、量子力学と希望という意識との関係性を探る学術分野にも深入りする必要があるような気がする。

今一度、灯台を海から見るという視点を取り戻そう。断崖下にあるリスクの海から灯台を見上げる。そこから灯台学を始める方法もあるんじゃないだろうか。と、カヤッカーからのひとつの提言である。